

氏名(国籍)	しん 申	うおん そん 媛善	(韓国)
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第4881号		
学位授与年月日	平成21年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	文末スタイルの運用に関する日韓対照研究 —人間関係の変化とポライトネス・ストラテジーの関わり—		
主査	筑波大学教授	博士(言語学)	砂川有里子
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	杉本武
副査	筑波大学准教授	文学博士	金仁和
副査	筑波大学准教授	博士(人文科学)	一二三朋子
副査	筑波大学講師	博士(学術)	澤田浩子

論文の内容の要旨

本論文は、言語が人間関係の調整に用いられる有様を常体と敬体に関する文末スタイルの選択という観点から考察し、日韓両言語を比較することによって両言語における文末スタイル選択のメカニズムを記述しようと試みるものである。

本論文の構成は以下の通りである。

- 第一章 本論文の目的と位置づけ
- 第二章 研究方法
- 第三章 文末スタイルの運用実態
- 第四章 日本語会話における「同調」の仕組み
- 第五章 ポライトネス理論からみた文末運用
- 第六章 相手領域への言及—情報要求発話を中心に—
- 第七章 教育への応用—日韓接触場面の観察から—
- 第八章 まとめと今後の課題

第一章では、本論文の目的を述べるとともに、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論及び敬語行動に関連する先行研究を検討し、本論文の基本的立場を明らかにする。

第二章では、本論文で扱うデータを紹介し、収集方法と文末スタイルの分類基準を提示する。出会いを重ねるにつれ変わっていくと想定される話者の関係が言語に反映される様子を捉えるため、本論文では初対面の話者同士が同一相手と日時を空けて会話した3回分の会話データを使用する。それをを用いて文末スタイルの観点から日本語と韓国語を比較し分析する方法論が述べられる。

第三章では、日韓両言語における文末スタイルの運用実態を調べ、両言語の類似点と相違点について考察する。調査は、回を重ねるごとに変化する会話間の推移と、1回の会話内での推移という2つの観点から行われ、それぞれにおいて文末スタイルの使用頻度とその頻度の推移が観察される。その結果、会う回数を重

ねるにつれ、日本語では基本スタイルが敬体から常体へと変化するのに対し、韓国語では敬体の基本スタイルに変化が生じないこと、および、同一会話内において日本語では敬体使用率の曲線が会話参加者二人の間で同様の軌跡を描く「同調パターン」が明瞭に観察されたにも関わらず、韓国語ではほとんど観察されないことが明らかとなり、初対面の相手に対する基本スタイルの選択では日韓両言語とも共通するが、出会いを重ねるにつれての文末スタイルの選択に関しては両言語で異なるメカニズムが働いていることが述べられる。

第四章では、日本語会話における「同調パターン」に注目し、該当する箇所における話者間の相互行為に関する考察が行われる。「同調パターン」が生起する箇所を調査した結果、隣接ペアや、相手の何らかの言及とそれに対する反応において「同調」やそれに先立つ「先行シフト」が生起しやすいこと、さらに、話題が移行する箇所では敬体、話題展開の過程では非敬体へのシフトになりやすいことが述べられる。

第五章では、日韓の文末スタイルの運用実態、及び日本語における「同調」現象を、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論に基づき解釈する。すなわち、日韓両言語とも1回目の会話における基本スタイルの選択はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーによるものでその点では共通するが、日本語での2回目以降の敬体から常体へという基本スタイルの変化はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーによるもので、韓国語ではそのようなストラテジーが観察されないことを論じている。また、「同調」に関して、相手と同じ言語形式をとるという点でポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであるが、敬体に同調するか常体に同調するかによってネガティブ的側面もポジティブ的側面も合わせ持つと主張している。

第六章では、相手に情報を求める発話を中心に考察し、日本語母語話者と韓国語母語話者が相手領域に言及する様子を比較・分析する。相手領域にふれる範囲やそこに踏み込む度合いを考察した結果、日本語母語話者に比べ韓国語母語話者による情報要求が幅広い範囲にわたっていることや、韓国語母語話者のほうが相手の私的領域に積極的に踏み込んでいることが明らかになり、韓国語母語話者は言語形式を用いたポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを行う代わりに、相手の領域にふれるという手段でポジティブ・ポライトネスを表示して心的距離の短縮を図っていることを主張する。また、情報要求発話の他、情報を受け取る際や、情報を提供する際の言語行動にも注目し、相手領域への言及において、日本語母語話者がネガティブ・フェイスへの配慮を重視するのに対し、韓国語母語話者はポジティブ・フェイスへの配慮を重視すると主張する。

第七章では、異文化間コミュニケーションや日本語教育への応用という観点から、日本語母語話者と韓国語母語話者による日本語会話（日韓接触場面）における言語行動を考察する。その結果、接触場面では会話内における「同調パターン」が顕著に現れないものの、会話間における基本スタイルの選択や変化においては日本語母語話者同士の会話と同様の傾向が現れることや、相手領域への言及においては日本語母語話者の方が韓国語母語話者に比べて積極的であることが明らかとなった。この要因としては、言語ホストとしての日本語母語話者、言語ゲストとしての韓国語母語話者という使用言語に対する非対称的構図が少なからず影響しているという主張がなされ、さらに、接触場面ではポライトネスへの配慮より正確な情報伝達への配慮が優先されるという可能性が示唆されている。

第八章では、本論文を総括し、本論文の持つ意義を、ポライトネス研究・日韓異文化コミュニケーション研究・日本語教育と関連させて記述するとともに、今後の課題を述べる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語と韓国語は、文末において対立する常体と敬体という形式を有している。これらの使い分けは、話し手と聞き手の人間関係によって決められるという点で日韓両言語とも同じであるとされていたが、本研究は両言語における敬体・常体の選択が異なるメカニズムによって行われていることを論じている。

従来この種の研究は、アンケート調査に基づき、社会言語学的な手法で分析されることが主流であったが、本論文では、日韓両言語による自然会話を用いて談話分析の手法で分析する。初対面の会話をデータとするが、初めて会ったときだけでなく、2回、3回と回を重ね、親しさが増してゆく過程での会話も収録し、時間の流れの中での文末スタイルの推移という点に着目することによって、話者同士の人間関係の変化が文末スタイルの選択にどのような影響を及ぼしているのかという課題に取り組んでいる。

本論文が独創的なのは、「1回ごとの会話内での時間の推移」と、「1回目から3回目までの会話間での時間の推移」という2つの異なる時間の推移に着目した点である。その結果、「1回ごとの会話内での時間の推移」の分析により、文末スタイルを相手のスタイルに合わせて変化させる「同調」という現象を見いだしている。

「同調」現象は、インターアクションの時間の推移に応じた変化に着目した独創的な知見であり、これを見いだしたことは本論文の大きな功績である。日本語の会話においては会話参加者が「同調」という現象を用いてポジティブ・ポライトネスを表現するのに対し、韓国語の会話ではそのような現象が観察されず、その代わりに、相手領域へ積極的に言及することによってポジティブ・ポライトネスが表現されていると主張しているが、この主張も時間の推移というダイナミックな観点を導入することで得られたこれまでにない知見である。韓国語母語話者が日本語母語話者に比べて相手領域に言及することが多いこと自体はこれまでに指摘されていたが、その現象をポライトネスという観点から再解釈し、日本語と韓国語の文末スタイル選択のメカニズムと結びつけて論じたのは著者が最初である。日本語と韓国語は類似する敬語体系を有するが、敬語行動、特に人間関係調整のための戦略としての言語使用においては異なる傾向を見せること、および、日本語においては文末形式が、韓国語においては相手領域への言及が、相手との距離を調整するための手段として使用されていることなど、これまでにない新しい主張が試みられた意欲的な論文である。データの量が必ずしも十分とは言えないが、時間の推移という観点からの新しい分析手法を示したことは評価できる。今後はデータの量を増やし、実証性をさらに高めることが求められる。

文末スタイルシフトの対照研究にポライトネス理論に基づくひとつの方法論を提示し、日韓両言語の敬語運用におけるメカニズムの解明に貢献したことに、本論文の大きな意義が認められる。今後の研究のさらなる展開を期待させる優れた論考である。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。